

優秀賞

神内真利恵さん(教育学部)

学校での性差別の「見える化」を成し遂げた、教育関係者必読の一冊

『「女の子」は学校でつくられる』マイラ&デイヴィッド・サドカー著；川合あさ子訳
出版社：時事通信社 出版年：1996年

この本は教育学部の私が大学に入った頃に、中央図書館の教育関係の棚で見つけて手に取った本だ。

「“女の子”は学校で作られるってどういう意味だろう？」と、この題名は私の関心を引いた。

この本は、学校という場所がジェンダーとしての「女の子」を作り上げていき、それが「女の子」に取って有害で不公平であるかという事を、約25年もの間、アメリカ国内の様々な学校の授業を観察し、示したものである。

この本が主張するのは、同じ教室で教育を受けていたとしても、児童・生徒・学生の性別によって、受け取る教育が違うということである。

先生は男子・男性の方ばかり向いているな、というのは、共学の学校に通う女子・女性なら、結構な確率で感じた事があるのではないだろうか。その事が、客観的事実であったという事がこの本の中で示されている。

女子は理系が苦手、後から伸び悩む、という事を繰り返し見聞きする事や、教科書やテストの登場人物や内容が男性中心で男性を向いているという事から、女子が自信や意欲を失っていく過程も、この本の中で触れられているが、同様な体験をした事がある人は多いだろう。教科書で、女子が教えられる役ばかりで嫌だったのを思い出す。

この本では、大学や大学院での不平等についても書いてあるのだが、その部分を読んで、私も今現在進行形で不公平な教育を体験しているという事に気がついた。例えば、教員の例え話や進路に関する話が、学生が男性である事が前提である事は、残念ながら多々あるし、女子学生に対する話し方だけあからさまに、悪い意味で、違う教職員に出会う事は少なくない。

この本を読んでいるうちに、大学のみならず、私の学校での実体験が次々と、フラッシュバックしていくようだった。

多くの女性が学校で感じていたことを、長期間に渡って授業風景の録画等をして調べ上げる事で「見える化」したこの本は、非常に貴重である。思い込みではないか、気のせいではないか、という思いを吹き飛ばしてくれる力が、この本には存在する。

考えてみれば、学校という場所はジェンダーステレオタイプを刷り込む装置になっている。

この本は、教育に携わる人々がジェンダーバイアスについて考えなくては、学校はフェアな環境にならないという事を教えてくれる。そして、自分の中の学校で身についてしまったジェンダーバイアスについても考えさせてくれる本である。

優秀賞

くろへい さん(文化構想学部)

書評『孤島の鬼』

『孤島の鬼』江戸川乱歩
出版社:KADOKAWA 出版年:2009年

江戸川乱歩の『孤島の鬼』を読んだ。この本は昭和4年(1929年)の一月号から翌年の二月号まで十四回にわたって博文館発行の大衆雑誌「朝日」に掲載された。彼の作品は社会的に周縁化されている二つのコミュニティに焦点が当てられている。一つ目のテーマは体が不自由な人たち、もう一つは男性同士の同性愛だ。

この本のジャンルはミステリーである。あらすじは、殺人事件が起こり主人公はその事件を追っていくうちに体の不自由な人が見世物として商売に出されていることを知る。一人でこの事件を明るみに出そうと四苦八苦している中、ひそかに主人公に学生時代から恋心を寄せていた先輩、諸戸道雄が主人公に接近し二人で事件の真相を暴こうとする、といったあらすじである。

研究によると、この小説を執筆中に江戸川乱歩は岩田準一という青年と恋愛関係にあったという。江戸川乱歩はインタビューで同性愛という主題を取り上げたことなどでたびたび同性愛について聞かれているが、そのたびに同性愛を、《異様な恋愛》、《異様な愛慾》呼ばわりしている。また、小説内では主人公に同性愛を考えたら「ゾッと総毛立つ様な何とも言えない嫌悪」が起こる、などと供述させている。このことから江戸川乱歩自身は同性愛に対して否定的であったと見える。それなのにも関わらず、岩田に惹かれていく彼自身を乱歩はどう見ていたのか。この涙ぐましいまでの同性愛否定、嫌悪はどこから湧き出てきたのか。そんなことを考えながら読み進めてきたら、ちょうど21歳のセクシャルマイノリティである自分と重なる部分が見えてきて、一気にこの小説を介して乱歩が身近に思えてきた。

実は自分も、ついこの間まで「内在化されたホモフォビア」と戦い、葛藤し続けてきたのである。自分が育ってきた中で、同性愛に関するヘイトをたくさん聞きながら育ってきた。初恋は異性だったが、小学校高学年に同性を意識し始める自分もいた中で日常的に両親や友達の同性愛嫌悪を聞いてきた。例えば、車の中で「槇原敬之」を聞いているといきなり父親が「この人はいいい曲を書くけど、おとこなのにおとこが好きなんだって」や、修学旅行のふろ場で「ゲイがいたら襲われそうで怖いわあ」などと言って笑い合う同級生やその冗談に便乗する教師たちなどだ。それらに囲まれてきた自分は、実際に21歳になるまで自分の同性に惹かれてしまう気持ちをひたすらに押さえつけ、無視しようとしてきた。なぜなら、それを認めてしまえば自分も「気持ち悪い」人たちの仲間入りをしてしまう気がずっとしていたからだ。

しかし、今は早稲田のGSでの大親友を含め、自分が自分である場所を作り、提供してくれる親友に恵まれて「内在化したホモフォビア」を自分の中から取り除いていけると自覚している。性的指向に限らず、基本的に人間は分かり合えない。しかしながら、エンパシーを使い相手の靴を履いて相手の人生を歩こうと心がけることはできる。実際にここに一人の当事者が「内在化されたホモフォビア」と20年以上葛藤をつづけ、今ここに在ることを頭の片隅に置いておいてもらえたらうれしい。そしてその葛藤がどのようなものなのか、上記に記した乱歩のエピソードを踏まえながら『孤島の鬼』を読んでもらえると少しは理解してもらえる気がする。興味を持った方はぜひ、手に取ってみてほしい。

優秀賞

なるさん(教育学研究科)

教科書を通して見えてくる、国ごとの「性」に対する価値観と取り組み

『教科書にみる世界の性教育』橋本紀子・池谷壽夫・田代美江子
出版社:かもがわ出版 出版年:2018年

「日本は性教育後進国である」

大学のとある授業の中で教員が発言した言葉だ。しかし、性教育後進国の中で育った私には、何がどう遅れているのか分からなかった。そんな時、日本の性教育の現状を教科書を通じて分かりやすく相対化してくれたのが本書だ。この本では、オランダ、フィンランド、フランス、ドイツ、イギリス、オーストラリア、中国、韓国、日本各国の性教育事情を、各国の歴史や法の流れから分かりやすく解説するだけでなく、現在の学習項目をどう教えているか、実際に使用されている教科書や教材を通じて分かりやすく伝えてくれている。

本書では、日本が性教育やジェンダー教育について、これほどまでに遅れるに至った経緯が書いてあり、自身の学ぶ権利が大人たちの「偏見」により奪われたことにとっても腹が立ったのを覚えている。主に欧米では、青少年の性行動に関するデータを真正面に受け止め、日本のような「寝た子を起こすな」という臭いものに蓋の原理ではなく、「性行動は当然起こす」という前提のもと授業を行っているのが印象的だった。例えば、性的接触をする際に気を付けること、同意をとる方法、性感染症対策だけでなく、付き合うというような人との関係づくりや、妊娠したらどこに相談するかということを、具体的な状況を設定し考えながら学んでいく。インターネットのゴシップではなく、科学的な知識も伝えるので、生徒たちは安心して知識を得ることができる。

私自身の経験として、「性教育＝セックスのこと＝恥ずかしいこと」という認識があった。また、自分自身がセクシュアルマイノリティ当事者であることから、どうしてもこれまで受けてきた日本教育の授業だと、まるで自分が規範から逸脱していると言われているようで、いつも自尊心を傷つけられていた。世界に目を向けてみると、性教育を小さいころからすることで、恥ずかしいことというよりも、自分の権利であり大切なことという価値観を持つことができるような仕組みになっていたり、悩んだ時に相談できる先まで詳細に紹介していたりと、手厚い指導だった。何より多様な性についても取り上げ、相談先も教えてくれるので、本を読みながらとても羨ましく感じた。

日本でも、「偏見」ではなくあらゆるエビデンスに基づき、性教育が改善していくよう、子どもも大人も含め未学習な現状を変えるために自分自身も何かできることをしていきたい、そう思わされた一冊だった。